

東日本大震災への支援



▲がれきの撤去や行方不明者の捜索を行う消防職員

食品類 1,148食
飲料水 385本
※県を通じて被災地へ送りました。
※物資の受け付けは、終了しました。

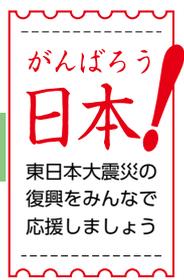
●人的な支援
消防職員 3月12日～30日の間、延べ33人を派遣し、行方不明者の捜索などを行いました。

水道部職員 3月14日～31日の間、延べ17人を派遣し、応急給水活動を行いました。

保健師 4月13日～19日をはじめ、延べ14日間、2人を派遣し、被災者の健康相談・チェックなどを行いました。

一般事務職員 4月24日～5月1日をはじめ、延べ48日間、6人を派遣し、被災証明の発行や仮設住宅への入居受け付け、避難所の運営などの業務を行いました。

医師 9月22日～27日の間、1人を派遣し、診療業務や現地の医師の支援などを行いました。



被災地は、今 6日間、被災地で医療活動を実施

インタビュー 大和診療所所長 藤家 証一 (ふじかしょういち)



9月22日～27日の間、宮城県とめの登米市と南三陸町で医療活動を行いました。南三陸町の志津川病院では、4階の天井裏まで津波が押し寄せ、入院患者109人中74人と職員3人が亡くなり、施設も全壊しました。自分の目の前で患者や仲間が亡くなるなど、「自分は助かり誰かが亡くなった」という体験に傷つけられていると感じました。現地は、元々医師不足の地域であったこともあり、医療スタッフに、疲弊が感じられました。薬もなくカルテもない。患者が飲んでいいる薬も分からないといった状況で、患者の病状を悪化させないために懸命に努力され、やっと落ち着いてきたという状況でした。私は、現地の診療所で外来診療や当

直勤務に携わりました。私が活動することで、休みを十分に取れていない常勤の医師が、久々の休みを取ることができ、意義があったと感じました。南三陸町のサッカーグラウンドには、被災地の中では最大の246戸の仮設住宅が並んでいます。暮らしている人たちの中には、生活の場をどこにすればよいのか、仕事を失いどうすればよいのかと、先の見通しが立たない人たちがたくさんいます。被災地の復興には、まだまだ時間が必要です。私たちに何ができるかは分かりませんが、みんなが心に留めて、何かできることはないかと常に考え、長期的に支援していくことが大切だと感じました。

▲全壊した志津川病院(中)。サッカーグラウンド一面には、246戸の仮設住宅が並び(9月24日、南三陸町で撮影)

東日本大震災による被災地の一日も早い復興・復旧は、みんなの願いです。皆さんから寄せられた義援金の総額は、2千4百万円に上っています。これまでに行なってきた支援の状況をまとめました。

●義援金合計額(10月31日現在) 2,405万8,279円

※社会福祉協議会により、全額を日本赤十字社、中央共同募金会へ送金しました。

※現在も、市役所本庁・各支所、社会福祉協議会本部・各地域センターの窓口や募金箱で義援金を受け付けています。

●物資の支援(受付件数 1,017件)

タオル類 24,408枚
肌着・下着類 9,533枚

☎三原市支援対策本部事務局(危機管理室内)
0848・67・6066